

滿洲に於ける技術者精神

(主として現場に在る技術者諸氏の爲めに)

正會員 三 浦 滯*

一 緒 言

發端滿四年日本肇國以來の大戦に直面しつゝ戦争完全の原動力たる兵力戦經濟戦思想に於て微動だに見せず、從來通角通外交の評のあつた外交戦に於ても東亞の盟主として未だ嘗て見られざる成果を擧げつゝ、あるを惟ふ外、我々は益々日本の實力の底知れぬ偉大性を驚嘆すると共にこの成果は悠久二千六百年神武天皇御即位以來萬一系の天皇を統首と仰ぎ奉り忠君愛國を基調とする日本精神により培はれたる事を日本國に生を享けし者の誰しも感ずる所である。

曠は何時果てるとも思へぬ。更に世界戦争しと導入さなつあるを思ふ秋日本民族所謂大和民族のみでなく血統的に環境的に日本と運命を共にする民族は總て包含する……者益々不拔の精神を以て難局に當らざるを得ぬ。世界戦争ともなれば悉く獨立獨歩の力を以て處理せざるを得ぬ立場となる時滿洲國の協力は總ての點に於て最大さを増すは當然の事である。國破れて個人なし。國體的自由あつて始めて國民各個の自由が存在する。西歐諸國の侵略主義による東洋諸民族の現状及現在行はれつゝある歐洲の戦況に於ても然り、絶對に敗けてはならぬ事である。如何なる困難に遭ふ共勝たねばならぬ。然し如何に必勝の信念が堅く共魂のみでは勝利の全部を配する事不可能である。形而下學的部門の國力の増大は必然的要求である即ち科學技術の生産による經濟力、兵力の増大なくてはならぬ。之科學者並に技術者に對する國體の期待の大となつた所以である。我等技術者は國家的義務的厚望に如何に應ふべきか、特に滿洲國に於ては我等として如何なる精神を常に保持すべきか二三卑見を述べて見度い。

二 滿洲といふ國

滿洲建國の國是は手段として日本と一體一心で五族協和して究竟には王道樂土道義世界の實現を目的とする事は常識となつ居る。然も日滿關係では不可分、第三國に對しては對等の獨立國なりと云ふ。之は單なる侵略主義により殖民地的擄取政策を行つて居る。諸外國の例に倣し且建國當時の在滿諸民族指導者の意志を反映して新國家育成には前記の方策が理想的なり、との結論を見した日本の大陸政策の表現所謂大陸日本版とも稱すべきものであつて、未だ嘗て世界史上類例のない新國家である。在滿の日系並に日本より觀察に來た人種の中極少數ではあるが餘り日本の政策は他民族を尊重し過ぎて反つて效果少しとの聲も聞くが、一時の資本主義的利権追求の理念から考へると思はずこんな義論の出で來るのも一應領れるが各民族その所を得しめると云ふ、大御心を拜察すれば右の義論の不可な事は明瞭である。尙大和民族の傳統精神として擄取を主とする思想は普遍性が乏しい。一部の人々には可能であつても東洋の道義國を以て任する大和民族の本性として永續性がない、即ち徹底した利己主義になり切れぬといふ要點に存する故である。天孫萬天原民族が先住民族を平定した後之等民族と融合して今日の大和民族となつた事を懷ふ時思ひ事に過ぐるものがある。然し現實には日本國の運命と共同體となつた滿洲は戰時體制下にあつて總ての點に於て經濟統制を受けて居る以上日系(半島系を含む)以外の民族には現在の事象を以て理解し切れず或は反日的感情を醸す恐れもあるが、之來滿洲が確たる統治者なく群雄割據して種々の不合理が行はれて居た十年前から今日見られる、滿洲國の躍進は總て日本の援助と指導に依らなければ存在し得ぬ事を知れば當然な事實として受け入れらるべきである。この點の理解力の増成はこの方面を擔當する爲政者は勿

論は満日系各人の義務である。又五族協和の早急的解決法として日系と他民族との結婚が最良策と云ふ人もあるが之が實行された時果して得られる民族精神は如何、滿洲は精神的に日本と一體である。永久に日本精神が基調となるを要するから現在のまゝの隔つた民族精神の結合は日本にはなり切れぬ。日本精神に他民族が融合して来る時は精神的異なく、従つて民族別なく何等の不自然さなく民族の結合が行はれ健全な日本精神一色とならう。之迄には相當の年月を假して彼等の指導及教育により氣長に俟たねばならぬ問題である。

三. 指導の意義

在満日系職員は總ての點に於て指導者として認容されて滿系に對し特殊の待遇を受けてゐる。然し乍ら實力上指導者たるが故で民族性に附隨したのではない。従つて日系なるが故に全てが優秀なりとして自己の行爲は之を是とし利己獨善的な行動も起り易いが之は大いに慎むべき事である。殊に第一線に立つて現業に活躍する日系は人手不足の關係もあり相當の責任ある業務に従事してゐるが、日系なるが故に多少の事いふ誤認され得るが如く誤解して兎角放棄となる恐れも生ずるが、常に自己の行爲が他民族に影響する事を思ひ反省して、滿洲建國の意義を検討する時、指導者たるの實力涵蓋を第一義的に努力すべきに到達するであらう。尙概して滿洲は自己の保身を主として最少の努力を以て安逸に暮す事に専念する餘り責任を持たぬかの如く見受けられるが指導者たる者、五族協和の意義を充分理解し他民族を放任する事なく大いに活用して各職務に於て鍛練するの實務がある。特に建設部門たる技術方面は年々滿系技術者の學校出身者も増加する故、此れら滿系職員の活用並に指導には一層の關心を持ち氣長に其の達成に心掛けると共に自身の練習にも専心すべきである。

四. 技術者の使命

建國以來十年我が滿洲國は各方面に亘り驚嘆すべき躍進を遂げた。特に建設部門は日本技術者の手により急速なる發展を見、加之に支那事變に於て日本との不可分關係より生産補充の爲め一層の拍車を掛け日夜關係技術者の大奮闘してゐる事は衆知の事である。日本に於ては今

日迄明治維新後七十有餘年今や世界最強の一員となつた。東洋の未開國として白色人種國より隔あらば願若くは植民地化せんとする鋭鋒を避ける爲め一日も早之等諸國と同等の文化となすは最大の急務であつて、石混肴只管咀嚼する事に専心したのは誠に止むを得なかつた事で、従つて今日日本民族の文化は只模倣と云はれ、短日月に之の進展を遂げた事は世界史上稀なであつて日本民族の智能の優秀さをこそ物語れ決して等さを示すものではない。現に日本國に於ける發明力見るに昭和年代の特許並に實用新案登録出願件數に於ては獨米に次ぐ世界第三位で獨逸は件數に於て年々減少つゝあるも數に於て斷然群をぬき日米や、同數であるによつても明瞭な事實である。エドワードシユベンガーは「人間と技術」に於て「十九世紀の後半迄は西歐及北アメリカが總ての權力即ち經濟的・政治的・軍事的・的權力に關して優越し獨占し、世界の開拓に付き日人技師が獨占し、日人勞働者は有色人種のそれに比し其の收入を得て、贅澤な生活をなして居た。十九世紀のに至り此の技術的智識を開放的に世界各國に提示したで日本印度は驚嘆したが利益のある爲に生産物の輸出共に秘法、方法、技師達の輸出が始まり、日本人は五月の間に第一流の技術的精通者となり今日では至る亞細亞、印度、南阿佛利加に於て工業地域が發生したが、夫等は賃銀が安いため致命的競走者となり白色種の特權は濫用され切りされた。而も西歐人種にとり技術は經濟の用具であり寧ろ自然に對する人類の勝利をつたが有色人種（ロシア人も含む）にとつては西歐明に對する鬭争の武器に過ぎない。従つて技術は有色種の手に移ると共に本人の目的は終局に近づく破壊まで來たと此の結論は白色人種の獨善であり、一種の黃禍論とも云へる。今日技術と云ふは一般に自然科學應用に關する部門で地下資源を開發し無より有を生じとか、諸材料の結合により發明をなし且建設をなし且的に大きな變革を與ふるものは技術の進歩による事だ。要は人類の福祉増進に貢獻することを目標とし違するか現時の戦争が兵力のみによらず、技術の漸重大な役割をなしてゐる事も亦衆知の事である。

シェンブラーの云ふ如く日本の技術の進歩は急速であつたが、特に重工業に於ける企業は歐米進進頭より取り入れたま、踏襲をなした資本主義經濟の形態なるが故に、日本的獨創的工業の少いのが遺憾とされ之を改革する事が今後の日本の技術者に與へられた責務となつた。翻つて我が滿洲國を顧るに政治的には觀念的に最も進歩した方法を取り逆に大いに日本に範を示してゐる點は多々あるが、技術的には日本又は外國輸入の技術が大部分である。此處に滿洲の性格を有する技術の振興が叫ばれる所以である。又曰、滿技術者の各個人當りの擔當を比較するに如何に滿洲は過重であるから分る。即ち技術者の不足である。従つて馬車馬式となり勢の赴く所拙速となる。殊に外業の事業の大部分は工事期間として大體六個月位より有せぬ惡條件の下では、只管ら不満足なら完成に努力せざるを得ぬ。従つて滿洲の性格を有する十分な技術の檢討は出来ない状態となる。而し乍ら理國家建設の途上にある滿洲國に於て技術者の不足のみを以て現状に甘んずる事は出来ない少しでもより以上の成果を擧ぐる事に努力するは在滿技術者に與へられた大きな課題である。筆者は元來土木工學專攻となるを以て實を土木技術者諸氏を對象として二三所感を述べよう。

1. 中央として特に考慮すべき事項

1. 人員の充足

前述の如き現状に於て良心的なる技術の施工には増員を要す。殊に近時工事用物資の大部分は統制下にある關係企業者に於ては之が整備即ち蒐集配給の爲め工事業務の遅延となり、之が奔走に非常なる努力を要し之が所要人員は相當の數に上る。勿論量より質の向上なる事は不解決の問題であるが何を標準として質を定むるかは困難であつて、要は其の人の本領を發揮せしむべき業務を與へれば、各人共に充分なる働をなし得る。従つて人員を増やとなす事は緊急的條件である。各方面共技術者不足であるから日滿支を通じて統制をなし、止むを得ぬ時は命令の發動を望む筆者の算定では所要人員は少くとも五割増となる。尙技術指導階級の招聘は特別の考慮を要し當方より指名による招聘者は別として恩給者の

高官は反つて一般に老将の給養所の如き感を抱かず印象を與ふれば新興國としての志氣に影響する所大である。必要ある時は屬托とするも一方法と思はれる。

b 土木研究處の設置

滿洲の技術振興には速かに一大綜合研究處の設置をなし技術的指導者のプールともなし現地との交流も行ひ常に現地側(軍官民を含む)を充分な研究機關として利用する。

研究項目によつては既往の試料を蒐集すれば部分的には参考のものも多數あらうと思はれる。又廣く一般に懸賞募集等により技術の向上を計るも一法である。

c 現地座談會の開催

研究項目別に土木研究處が主體となり現地に各機關々係者會合の上座談會を開き後實地の見學をもなす。但し座談會は成功談許りになり易い特に失敗する。點に置きをおき共に検討する即ち技術並びに知識の交換を主目的とするものである。

B 現地に於て一層努力すべき事項

a 常識の涵養

高等官及委任官登格考試委員の方々よりよく話される事柄であるが「技術者は常識問題に對する理解の缺除が甚しい」と。過去の技術者は大概わ時勢にのを以て誇りとするとか努めて社會と没交渉たらんとする等の退嬰的超俗的の點があり又社會も當然としてゐるが、之には種々の理由もあるが、省略するとして現時建設部間擔當者として、疎んじては總體に不可能となつた。常に時局の認識を要し因つて來る日々現象に深い洞察を要する次第で特に滿洲國と云ふ複合民族國家では建國の意義を完全に把握し各擔當部間の目的並に社會との相關性を認識せしむ非常時に我等技術者として社會の要望に應ずる事は不可能である。即ち専門の技術そのものに専念する結果社會性綜合性を無視し偏狹となるを避けなければならぬ。

b 土木技術的特異性の確認

之の點は土木研究處の研究題目の中にも包含さるべきであるが現地に於ても滿洲に於て日本と特に異なるのは寒暑の差の甚しき點、濕地、河川等であつてその處置には

相互に研究しつ、箇に當り失敗に屈せずよりよき建設へ進まなくてはならぬ。特に理想的材料の容易に取得出来ぬ今日現地材の利用法は大いに着目しなくてはならぬ。

c 滿語の修得

永い將來には滿洲國語は如何になるや別として現時滿語の必要を最も痛感してゐるのは現在の人達と思ふが特に講習會個人指導より修得を要する。殊に滿語は民心把握並に指導上第一線に立つ人々にわ不可欠の事で大いに努力すべきである。

d 自己研鑽

人員不足の折衝育目的に働くを得ざる結果最も有効適切なる方法の考究は兎角忘れ勝となる。自己擔當の業務に對しては常にその結果を注視し新業務に於ける参考とする。殊に我が滿洲は廣大な地域に各個分放的に配置される事が多く直接指導すべき人を得ぬ結果行動上技術上獨善的となる。故に自己の業務に愛情と熱とを有しつ、箇に當ると共に反省して自己研鑽をなし充分な責任感の下に一を以て十に當る丈けの實力を養はなければならぬ。

e 自體研究會の開催

一年中の最も閑散なる時期を利用し、各現地機關に於てその年に於て施工した特異的技術につき、偽らざる報告をなし相互に討論し各自の技術的智識を豊富にする。又精神的問題並に社會的問題に付き講演會、座談會を催し精神的に技術的に陶冶練成を計る。尙中央に於ての指導者階級は現地出張の際は努めて現地の各員と座談をなす機日程を作る要がある。

五 技術者の協力

技術者は自己の専門部門のエキスパートたらん事に努力するの餘り特にエキスパートになる程やゝもすると獨善、狷介とも云はれる様になる。エキスパートとして大いに自信を持つ事は必要ではあるが終始物事を自己中心にする事は反つて社會的協力が少くなり、特に日本に於て見られる傾向であるが各人間に確執を生ずる原因ともなる。

日本人は餘りに事擧げする傾向が強すぎて殊に技術上の意見の對立の爲め、各個人の力量は如何に優秀なり其

協力する度量がなければ反つて負の力となり、そこに進歩は生ぜぬ事となる。良策と認められた時は一致して目的達成に努力しなくてはならぬ。即ち學術的技術競争は大いに奨励して互に練磨を要するが、之を感情味なつて一般業務に迄及すことは絶體にさけたい事である。殊に滿洲は官僚的色彩少く勤務上の鬱陶しさは餘なく大いに下情上通が出来得て、良策と思へば頂戴な進言して、より良き發展へと進み得る良い點がある。

但し決定迄に種々の意見の對立があつても一旦上司於て決定した事項には、例へ自己の意見と反對であつても之の方針に従ふべきで決して面従腹背のない事を期す。自分等の長に對しては互に周圍より擁護してそのを完全な長として練成しなくてはならぬ。

所謂ピラミット型なるを要する訣で、行政方面に於ては若い上司に對して而も今迄の業務と異つた長が來し下僚の古學者は周圍より育成の役を務める爲め長なるは次々職場をへるに隨つて大成した政治家となつて行此の點我々技術者は大いに範とすべきである。

尙技術者は形而下學的問題を取扱ふその成果に付し兎角批評され易い。よく失敗すれば責任をとる即ち謝すればよいと云ふ人もあるが最善をつくして事志と反る時は破棄取行ならざる限り寧ろ踏み止まつて一層の力をなし、次の成果を期すべきで、技術者にはそれだけの自信と氣力を有すべきであり、且周圍からも激勵しなくてはならぬ。

六 結 語

以上長にと述べて來たが要は技術者は常に時局を觀しつ、睿智、忍耐、努力、を信條とし自己の技術の續に努め内にあつては互に協力、外に對しては國家的則を目的として邁進しなければならぬ。